
晴れ時々曇り

三日月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
晴れ時々曇り

【Nコード】
N2111F

【作者名】
三日月

【あらすじ】
こんなつらい思いをするくらいなら、恋なんてしなくなかった・

ブログ（前書き）

全然更新できないと思いますが、どうぞ見てやって下さい）・（
ノ

ブログ

愛すると、辛い思いをたくさんする。

愛されると、辛い思いはしない。

私には、どちらがいいかは分からない。

．．．けど、これだけはわかる。愛し合っていると、どちらも幸せだってこと。

File 1:合コン

「美紗あ！今から合コン行かない？？」

友達の佯技せんぎ 華菜かなが、私を誘ってきた。どうしようかと悩んでいたが、華菜の

「美紗好みの人来るよー！！」

の一言で、行くことに決めた。

学校がやつと終わり、カラオケへと急ぐ。

（私好みかぁ・・・ほんとにいたら最高っ） そんな事を考えながら、身なりを整え、中へ入る。今は自己紹介中だった。私は、男の顔を見ていく。私好みの人はいない。・・・が、このまま帰る訳にもいかず、端っこに座る。（暇だなぁ・・・） と思いながら、携帯をいじっていた。そこに、

「遅れたっ！！」

と、声がした。（どうせ、好みじゃないだろうな・・・）と思い、顔をあげなかった。しばらくすると、誰かが私の横に座り、

「暇だねー 二人でぬけない？？」

と、話しかけてきた。誰だろ？と思い、顔をあげ、その人を見てみると、私好みの人だった。

「あっ・・・いつ・・・いいですよ。」

緊張しながら、答える。

「良かった。じゃあ行こうか。」

の声と同時に彼は私の手をひき、部屋からでた。

この先、どうなるかを知ってたら、私は彼についていく事はなかっただろう。

ただ、その時の私には知る由もなかった。

File 2: 海（前書き）

更新遅くてごめんなさいっ（・・・）
これも、のんびりと更新していく予定なんで、暇なときに来てみてくだ
さいな（ ）

これが

File 2：海

「美紗っ！ーあの後どうなったの?!」

朝っぱらから馬鹿でかい声で華菜が私に問う。

あのと・・・

私達は、いったん外に出た。しかし、彼は手を離してくれず、とまどっていたら、

「あっ・・・ごめん」

と、言つて手を離してくれた。そんなちっけな事にもドキドキしている私がいた。

「・・・ところで、出たのはいいけど、自己紹介しなかったよね？」

そつえば、そうだなと、思い、頷く。

「だよな。」

俺は、娜倭川高校の2年で、荒木 あらいぎ さとし 悟つていうんだ。字は、荒れる木に悟る。えつと・・・君は?？」

荒木 悟・・・かぁ。てか、娜倭川高校って、あの、有名な??と、考えてたのが顔にでてたのか、

「俺にとつては普通の高校だけどね」

と、言った。そして、名前を名乗っていないのに気付き、

「あっ・・・えつと、私は南魁高校の2年生で、佐敷 さしき 美紗 みさ っていいです！美紗って読んでくれて結構ですっ あっ・・・字は、

佐藤の佐に屋敷の敷に、美しいに、糸へんに少ないって字の紗です。

」

・・・と、そこで彼・・・じゃなくて、悟が笑い始めた。涙までうかべている。少し、ムツとしていると、私に気付いた悟は、

「ごめんごめん。説明があまりにも詳しくてさっ！」

そののどこがおかしかったのかなあ？？と考えている内に、

「よしっ！名前も分かったし、行くか。」

と、声がした。見ると、笑いは止まっていた。

それにしても．．．どこに行くんだらう？

「あつ．．．海に行きたいんだけど、いい？？金は俺持ちで。」

6時だから少しだけ暗い。なのに、なんで行きたいんだろ？寒いし．

．

と、思ったが、海好きな私は

「いいよ」

と即答した。

「うつわー！！きれーっ！！」

海についたのは6時半で、それなりの暗さだったが、その暗さが、海のきれいさを更に引き立てていた。しばらく、時間を忘れて海を見ていたが、視線を感じ、見上げる。そこには、悟の顔があった。

「あの．．．私の顔になんかついてますか？？」

漫画のような、台詞で悟に聞いた。

すると、悟は

「．．なんでもないよ。ところで、海、好きなの？」

と、逆に聞いてきた。はぐらかされた気もするが、まっ、いつか。

と、自分を納得させ、質問に答えた。

「うん。大好きっ！！なんかさ、海って見てると落ち着くんだあ」

そう言った私に、悟は軽く微笑み、

「そっか。」

と、言った。

そのまま、特になにもなく、私達は帰った。メアドは一応聞いただけ。でも、私はなぜか、メールはこないと確信していた。私か

らも、メールはしてはいけないと、思った。なぜかなのかは、分からないけど・・・

「・・・と、いう訳で、メールは一度もしてませんっ！！報告終わりっ」

言った途端、

「と、いう訳で、って・・・だいたい、なんでメールしちゃいけないのよ？」

と、華菜が呆れた顔で聞いてきた。

そんなの、私にだって分かんないけど、私の直感がそういつてるんだもんなあ・・・うん。仕方ないよね。

と、考えていると、

「もうっ！せっかく、セッティングしてあげたつてのに・・・」

という、文句が聞こえてきた。

それならっ、と思い、私は逆に華菜に昨日はどうだったかを聞いてみた。きつと、駄目だろう・・・と思って聞いたのに、華菜は、

「私？ 私はあんたと違って、優秀だから、ばっちりゲットできたわよ？」

勝ち誇った顔で、すんなりと答えた。そして、新しい、彼氏のメアドをみせてきた。

それから、三ヶ月が過ぎたある春の日に、私は、あの、懐かしい、
悟の顔を見た。

そこから、私の日常は崩れていった。

File 2：海（後書き）

評価・感想、下さると嬉しいなあ・・・

File 3：予感

先に気付いたのは私だったが、違うよね？と思った。しかし、彼が私を見て微笑んだのを見て、やっぱり．．！と、確信した。

「久しぶりだね。」

彼は私に近付き、そう言った。

「．．．ほんと久しぶりだね」

突然の再開に驚きながらも、少し嬉しさも感じている自分が嫌だった。

「あのさ．．．話たいことあるんだけど、今、大丈夫？？」

「少しだけなら．．．」

と、承諾し、私達は喫茶店に入った。

飲み物を頼んで待っている間、彼が口を開いた。

「．．．急にごめんね；話したいことっていうのは、彼女になってほしいんだ。」

急な展開についていけず戸惑う私に、

「あつ．．．ごめんね。急に彼女になって、って言われても困るよね．．．実はね．．．」

と言って、彼女になってほしい理由を言った。

なんでも、彼の父は有名な会社の社長らしい。つまり、彼はお坊ちゃまっでこと。

そして、社長の息子といえば、政略結婚。

彼は今月までに彼女ができなければ、好きでもない人と結婚させられるんだって。

「．．．えっと、ごめん。理由は分かったけど、なんで私か分かんないんだけど．．．」

そこまで聞いて、私は疑問に思った事を聞いた。

「えっと、それは、俺、合コンってした事なくて、あの日が初めてだったんだ。で、女の子ともあんまり接する機会がなくて、でも、君に．．．」

軽くパニックっていた悟だったが、

「つまりっ！！嘘の彼女でも、やっぱり好きな人が良くて君に今頼んでいるんだけど．．．」

やっぱり、駄目だよな??」と、勢いで言った。

一瞬なにがおこったか分からなくなり、今度は私がパニックに陥ってしまった。

「えっと．．．つまり、悟は私が好きだったってこと?」

1番に思った事を聞いた。すると、悟は、ほんの少し顔を紅色にそめ、頷いた。

かわいいなあ．．

と思わせる顔で

「駄目．．かな．．?」

と、聞いてきた。

そんな顔をされた私は、断れるはずもなく、頷いてしまった。

File 3：予感（後書き）

読んで下さってありがとうございます（ ）（ ） 更新遅くてごめ
んなさいww 感想

等書いていただけると喜びます（ ）（ ） 笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2111f/>

晴れ時々曇り

2010年10月28日01時40分発行